

して、赤道域、太陽活動、ピナツボ火山、気候影響、GCM 比較、重力波等々、実に多様化している。

しかしながら、この一見賑やかな盛況を、1980年代前半のMAP (中層大気国際協同観測計画) の努力の結果であると手ばなしによるこぶだけで良いものかどうか。たとえば第2週の重力波ワークショップで、狭い教室に入りきらぬほど百人近くが集まったが、内容的に見て本当に新しいものは必ずしも多いたとは言えなかった。ましてやこれが、一時的流行や附和雷同であっては困る。(似たような事情は、最近の TOGA-COARE. 今年の気象集誌6月特別号は、玉石混淆以前の、粗製濫造と言われてもしかたがなからう。)底辺の拡大が全体のレベルアップにつながる、と言えば聞こえは良いが、その反面、研究の世界においては大衆化に伴う安易な自己満足や甘い評価基準は厳しく律されねばならない。いかに同好会とは言え、市民マラソンとはわけが違うのだ。

今回の中層大気関係で、発展性を秘めた新しさ、という点で目を引いたものは、やはり UARS 衛星の観測結果である。測定データの検定・一次処理が終わり、ようやく本当の意味での解析結果がそろいはじめ、素

朴現象論として興味ある図表がいくつか発表されている。問題は従って、これらのデータ解析の中から、観測事実としてまたそのメカニズムの解釈として、10年後20年後までテキストに残るような成果が定着するか否かにかかっている。

振り返ってみれば、過去から現在に至る研究の発展は、必ずしも一定のペースで進んできたわけではない。むしろ、新しい展開は、突発的間歇的な少数の優れた研究成果によってもたらされてきた、と言ったほうが良い。それがまさにエポックというものである。事実、私自身がこれまでに出席した IUGG や IAMAP の研究集会の場で発表された論文の中には、今もってスタンダードとして引き合いに出される優れた仕事はいくつか残っている。(論文の引用に必ず年号を併記する意味はそこにこそある。)

今回、2週間にわたり数多くの発表を聴いて自分自身のアンテナに感応した部分のメモを見返しながら、この集会の成果が今後10年経ったときどれだけ多くの人々に記憶され研究面に反映されているであろうかと、期待と不安のなかば入り混じった印象を感じた次第である。

編集後記：今年の夏は、中部日本にも豪雨の被害が出ました。この文を書いている8月中旬では台風の発生数は極端に少ないのですが、今月号がお手元に届く10月初めではどうでしょうか。台風の大きな被害は発生しなかったでしょうか。稲の実り具合はどうでしょうか。気象を生業にしていると、今日の天気から季節の推移までいろいろと気になることが多くなります。

日本は南北に長く、そのうえ山あり川あり海ありと変化に富んでいます。関東に住み着いている私などには想像だにできない現象が、それぞれの地域にあるはずで、また、普遍的な現象のように思えても良く見ると地域毎に違っているかもしれません。逆に、地域特有のものと思っても、余所に似たような現象があるかもしれません。ですから、地域的な現象(メソスケールと言っても良いでしょう)に興味を持つ会員

が全国的に交流するのは意味があります。

ここにも「天気」の定番があります。年2回の大会が交流の良い機会ですが、種々の理由で出席するのが困難な会員も数多いでしょう。「天気」は、原則的には気象学会の全会員の手に届く月刊誌です。数か月の時間差はありますが、装置が無くても絵や写真入りで説明できるなど、紙のメディアももうしばらくは捨てたものではありません。論文でなくても、カラーページ、気象談話室、情報の広場、支部だよりがあります。内容に応じて分類はいろいろでしょうが、会員からの発信がなければ始まりません。印刷費を執筆者に請求することはありませんので(論文等カラー写真は例外)、情報交換誌としても利用していただければ幸いです。

(里村雄彦)